

ま え が き

時代に適した新しい人材の育成は、研究の重点化・レベルアップ及び産学官連携・地域連携などの社会貢献とともに、現代の大学における使命です。

工学資源学部においては、「グローバル化時代の資源学への対応」、「社会の要請に応える人材の養成」そして「地域社会への積極的な貢献」の3つを基本理念として掲げております。

一方、秋田大学の教育目標として「社会の変化に柔軟に適應できる幅広い教養と深い専門性、豊かな人間性と高度の倫理性を備え、社会の発展に貢献できる人材の養成」、「地域の文化的・経済的発展に貢献できる人材の養成」及び「国際人として通用するコミュニケーション能力・異文化理解力を備えた人材の養成」の3つを定めております。

これらの基本理念及び教育目標をもとに、学部の中期計画では、授業形態、学習指導法に関する具体的な方策としてFDワークショップを継続的に実施し、教育の改善に努めることを謳っております。

この度実施された学生による授業評価は、上記のような大きな潮流のもとに、教員各自の教育改善及び授業評価を含めた教育改善システムの点検の要素として機能するものであり、今後も学生による授業評価を継続的に実施し、その結果を学生及び教員にフィードバックすることにより、更なる教育改善の効果が期待できるものであります。

最後に、本報告書作成にあたり、平成15年度教務学生委員会委員をはじめ、関係の学部教職員各位に厚く御礼申し上げます。

平成17年2月

工学資源学部長

川 上 洵

I はじめに

本報告書は平成 15 年 11 月に自己評価委員会から付託され、同年度後期に教務学生委員会が実施した学生による授業評価結果をとりまとめたものである。この授業評価実施に関する自己評価委員会による意義・目的は以下のとおりである。

意義・目的

教育における授業の果たす役割は大きく、授業の教育的効果を高める方策が早急に求められている。このためには学生の要望に対応できる仕組み、学生の主体的な学習意欲を喚起できる仕組み、教える側の意識を変えて行くことのできる仕組みなどが必要である。

「学生による授業評価」はこれらの仕組みを実現する有効な手段の一つであり、学部全体の取り組みとして実施する。「学生による授業評価」の結果は整理・分析して報告書としてまとめて公開し、授業改善が大学人としての責務であることの共通認識を得ることを目指す。

付託を受けて、教務学生委員会では平成 15 年 11 月以来、委員会内にワーキンググループを編成し、ワーキング委員会と定例の委員会において、授業評価項目とその実施方法について、慎重かつ十分な議論を進めてきた。特に評価項目については各学科での検討を依頼した。以上の経過を経て、本委員会では以下の要領で授業評価を実施した。

1. 実施主体

工学資源学部自己評価委員会からの付託を受けて、教務学生委員会が計画・実施する。実施に当たり、関係教官は全面的に協力する。

2. 実施時期

平成 15 年度後期授業において、最終試験前の平成 16 年 1 月下旬 2 月上旬に実施する。

3. 調査対象授業科目

工学資源学部で開講されている全専門授業科目（講義・演習）を対象とする。

4. 調査項目

別添の調査用紙による。

5. 調査方法

無記名方式で行う。

6. 調査の実施

授業を担当する教官が授業中に調査用紙を配布し、回収箱で回収して学務係に提出する。

7. 集計方法（入力）

全調査項目について処理機器で一括処理し、5 段階+無回答の計 6 段階で単純集計する。結果は棒グラフで表示し、%を添える。また各項目について概要を整理する。

8. 集計結果の取扱い（集計と返却）

集計結果は本調査目的以外には使用しない。回答用紙は今後の授業改善用の資料として担当教官に返却し、個々の授業の向上の助けとする。

9. 報告書・公表

調査結果については教務学生委員会で検討・分析し、報告書を自己評価委員会に提出する。報

告書の様式は今後の継続調査ならびに費用を考慮して、可能な限り簡素化する。内容の公表は工学資源学部自己評価委員会の判断にゆだねる。

本報告は「学生による授業評価」の主要部分をまとめたものであり、自己評価委員会に報告し提出することとした。

II 授業評価実施科目、評価項目及び回答数

II. 1 授業評価を実施した授業科目

授業評価実施科目は以下のとおりである（括弧内の数字は回答件数）。

地球資源学科（24 科目；平成 14 年度 13 科目）：岩石学Ⅱ（20）、鉱物学（22）、鉱床学応用実験（9）、地史学（22）、地球物理学Ⅰ（23）、第四紀自然史学（27）、地質図学（24）、構造地質学（14）、応用地球化学（14）、外国文献講読Ⅱ（21）、資源開発学（33）、鉱山システム工学（25）、地殻開発工学（26）、岩盤工学（18）、地下水理工学（32）、地熱開発工学（32）、石油・天然ガス開発工学（31）、資源予測工学（20）、岩石学概論（55）、流体力学（28）、システム・リスク分析（23）、計算機システム概論（8）、応用物理学概論（12）、応用数学（18）

環境物質工学科（35 科目；平成 14 年度 21 科目）：資源処理工学（57）、特殊精錬工学（44）、生産環境工学（43）、化学工学量論（53）、移動現象論Ⅰ（65）、素材情報学（38）、有機化学Ⅰ（80）、有機合成化学（44）、量子化学（17）、界面触媒工学（43）、触媒化学（65）、機能高分子化学（30）、基礎高分子化学（58）、有機反応化学（58）、物理化学Ⅰ（70）、無機プロセス化学（52）、高温反応化学（56）、生物工学基礎（32）、環境物質工学概論（75）、機器分析学実習（70）、資源循環学（52）、プロセス制御工学（36）、高分子工学（21）、粉粒体工学（52）、物質情報処理学（25）、化学プロセス学演習（43）、化学工学演習Ⅰ（54）、生体生理学概論（43）、流体力学（14）、材料加工学概論（7）、電子工学概論（9）、計算機システム概論（1）、応用物理学概論（1）、応用数学（35）、インターンシップⅠ（45）

材料工学科（28 科目；平成 14 年度 11 科目）：材料化学（59）、材料物理学Ⅰ（68）、材料組織学（51）、構造解析学（54）、物理知能材料学（16）、材料物理化学（47）、機能表面工学（38）、エネルギー変換材料学（41）、機能無機材料学（37）、セラミック材料学（57）、金属材料学（54）、材料化学プロセス学（34）、加工プロセス学（45）、結晶強度学（62）、電磁気学（48）、量子論概論（55）、材料評価学（22）、材料工学演習（38）、材料工学実験Ⅰ（56）、材料工学実験Ⅱ（46）、材料工学実験Ⅲ（44）、地域産業論（24）、外国文献講読（48）、アクチュエータ工学（1）、応用物理学概論（17）、応用数学（37）、計算機システム概論（33）、電子工学概論（9）

情報工学科（16 科目；平成 14 年度 9 科目）：情報処理学（50）、ヒューマンインターフェース学（50）、情報ネットワーク学（46）、基礎電子回路（41）、情報電磁気学（47）、パターン認識学（47）、情報解析学（48）、応用数理学Ⅱ（38）、数値シミュレーション学（39）、プログラミング言語（49）、コンピュータ実習Ⅰ（46）、システムプログラム（50）、グラフィカルユーザーインターフェース（42）、応用数学Ⅱ（52）、物質情報処理学（12）、交通システム計画（12）

機械工学科（13 科目；平成 14 年度 12 科目）：計算力学Ⅰ（68）、物質環境移動論（28）、流れ学（116）、機械システムダイナミクス（108）、機械製作学（77）、加工工学（41）、エネルギー変換

機器学 (80), デジタルコントロール (43), アクチュエータ工学 (84), スポーツ工学 (56),
 設計製図 I (76), 電子工学概論 (29), 計算機システム概論 (59)
 電気電子工学科 (28 科目; 平成 14 年度 11 科目): 電力システム工学 (44), 高電圧工学 (71),
 プラズマ物性工学 (66), 電子物性工学 II (84), 光物性工学 (57), 電子回路学 I (73), 超高周
 波エレクトロニクス (24), 情報通信工学 II (44), 信号解析学 (45), 応用情報計測工学 (73),
 信号処理システム工学 (66), 生体エレクトロニクス (27), パワーエレクトロニクス (67), 電気
 製図 (49), 電子制御システム工学 (70), 電気磁気学 I (92), 電磁界解析学 (31), 電気磁気学
 III (40), 線形回路学 II (15), 電気回路学 II (93), 回路解析学 (87), 計算機プログラミング I
 (85), 計算機システム学 (40), 応用数学 I (63), 応用数学 II (7), 応用物理学概論 (25), セ
 ラミック材料学 (2), エネルギー変換材料学 (14),
 土木環境工学科 (24 科目; 平成 14 年度 8 科目): 高齢者・障害者の交通計画 (48), 交通システ
 ム計画 (80), 福祉のまちづくり (51), 福祉のまちづくり工学 (41), 福祉防災水工学 (33), 福
 祉環境倫理学 (13), 生活環境工学 (33), 国土計画と地域開発 (48), 社会資本整備の歴史 (45),
 構造力学 I (56), 構造情報学 (52), 鋼構造工学 (27), コンクリート構造工学 (56), 建設構造
 工学演習 (22), 環境デザイン (39), 土質工学 (56), 環境気象学 (64), 水理学 II (71), 海岸海
 洋工学 (9), 土木環境工学特別講義 I (22), 公共投資論 (9), 応用数学 (19), 応用物理学概論
 (17), 計算機システム概論 (10),

II. 2 実施した授業評価の項目

授 業 評 価

A 授業科目名, 所属等について尋ねます。

問1 授業科目コードを書いて下さい。

問2 授業科目名を書いて下さい。

問3 あなたの所属する学科の番号を書いて下さい。

1. 地球資源学科 2. 環境物質工学科 3. 材料工学科 4. 情報工学科
 5. 機械工学科 6. 電気電子工学科 7. 土木環境工学科
 8. 旧学科 () 学科

問4 あなたの現在の学年の番号を記入して下さい。

1. 1年次, 2. 2年次, 3. 3年次, 4. 4年次

以下の各評価項目に対して, あなたの評価を 4 段階で行って, (評価欄) にマークして下さい。

【評価基準】

- 4 : そう思う, 3 : どちらかというと思う, 2 : どちらかというと思わない,
 1 : そう思わない, 0 : 該当しない, わからない

B この授業に対してあなたの評価を尋ねます。

問5 この授業科目を履修するにあたって, 授業要領 (シラバス) を読んだ。

問6 (前項に 4 または 3 と回答された方に尋ねます) シラバスと授業内容は一致していた。

問7 授業開始時に, 成績の評価基準や評価方法が明確に説明された。

- 問8 この授業では、教材（テキスト・配布資料・OHP）の使い方が適切であった。
- 問9 授業担当者の説明は聞き取りやすかった。
- 問10 板書の字は読みやすく、ノートはとりやすかった。
- 問11 自学自習のための指示（予習または復習の指示，課題の出し方等）は適切であった。
- 問12 この授業は学生の反応や理解度をみながら進められた。
- 問13 授業の内容に興味を持て、学習の意欲がわいた。
- 問14 この授業は目的や達成目標が明確で体系的であった。
- 問15 授業担当者の熱意を感じた。
- C あなた自身に対してあなたの評価を尋ねます。
- 問16 この授業へのあなたの出席状況は良かった。
- 問17 あなたの受講態度は良かった。
- 問18 この授業について、あなたの予習や復習の時間は、1回の授業に対してどの位ですか。
4：3時間以上， 3：2 3時間， 2：1 2時間， 1：1時間未満， 0：ほとんどない
- 問19 この授業の理解を深めるために、オフィスアワーなどを利用した。
- 問20 あなたはシラバスに記載されているこの授業の達成目標を達成した。

II. 3 授業評価学年別回答数

表1に学科ごとの授業評価実施科目数，学年別回答数，回答総数を示す。なお，学年別回答数はほぼ各学科の実情を表していると解釈して大過ないが，他学年，他学科の学生も若干含まれている。

表1 学科別・学年別回答数

	科目数	1年次	2年次	3年次	4年次	回答数
地球資源学科	24	55	327	175		557
環境物質工学科	35	225	587	674	2	1,488
材料工学科	28	127	522	491	1	1,141
情報工学科	16	41	336	292		669
機械工学科	13	184	358	323		865
電気電子工学科	28	270	552	448	184	1,454
土木環境工学科	24	157	405	359		921
合計	168	1,059	3,087	2,762	187	7,095

III 授業評価結果の概要

III. 1 授業評価集計表

工学資源学部 授業評価集計表

回答件数: 7095

問3 所属学科		
地球資源学科	560	7.9%
環境物質工学科	1466	20.7%
材料工学科	1136	16.0%
情報工学科	670	9.4%
機械工学科	851	12.0%
電気電子工学科	1436	20.2%
土木環境工学科	909	12.8%
旧学科	4	0.1%
	2	0.0%
無回答	61	0.9%
問4 学年		
1年次	897	12.6%
2年次	2903	40.9%
3年次	3124	44.0%
4年次	98	1.4%
無回答	73	1.0%
問5 この授業科目を受講するにあたって、授業要項(シラバス)を読んだ。		
そう思う	3171	44.7%
どちらかというと思う	1606	22.6%
どちらかというと思わない	870	12.3%
そう思わない	1282	18.1%
この授業にこの項目は該当しない、わからない	155	2.2%
無回答	11	0.2%
問6 (前項に4または3と回答された方に尋ねます)シラバスと授業内容は一致していた。		
そう思う	2199	31.0%
どちらかというと思う	2246	31.7%
どちらかというと思わない	276	3.9%
そう思わない	160	2.3%
この授業にこの項目は該当しない、わからない	628	8.9%
無回答	1586	22.4%
問7 授業開始時に、成績の評価基準や評価方法が明確に説明された。		
そう思う	2431	34.3%
どちらかというと思う	2552	36.0%
どちらかというと思わない	1141	16.1%
そう思わない	592	8.3%
この授業にこの項目は該当しない、わからない	358	5.0%
無回答	21	0.3%
問8 この授業では、教材(テキスト・配付資料・OHPなど)の使い方が適切であった。		
そう思う	1932	27.2%
どちらかというと思う	2532	35.7%
どちらかというと思わない	1139	16.1%
そう思わない	626	8.8%
この授業にこの項目は該当しない、わからない	847	11.9%
無回答	19	0.3%

総表

問9	授業担当者の説明は聞き取りやすかった。		
	そう思う	2000	28.2%
	どちらかというと思う	2649	37.3%
	どちらかというと思わない	1508	21.3%
	そう思わない	816	11.5%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	104	1.5%
	無回答	18	0.3%
問10	板書の字は読みやすく、ノートはとりやすかった。		
	そう思う	1530	21.6%
	どちらかというと思う	2309	32.5%
	どちらかというと思わない	1786	25.2%
	そう思わない	1045	14.7%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	413	5.8%
	無回答	12	0.2%
問11	自学自習のための指示(予習または復習の指示、課題の出し方等)は適切であった。		
	そう思う	1587	22.4%
	どちらかというと思う	2540	35.8%
	どちらかというと思わない	1435	20.2%
	そう思わない	680	9.6%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	843	11.9%
	無回答	10	0.1%
問12	この授業は学生の反応や理解度をみながら進められた。		
	そう思う	1373	19.4%
	どちらかというと思う	2598	36.6%
	どちらかというと思わない	1805	25.4%
	そう思わない	905	12.8%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	403	5.7%
	無回答	11	0.2%
問13	授業の内容に興味を持って、学習の意欲がわいた。		
	そう思う	1321	18.6%
	どちらかというと思う	2893	40.8%
	どちらかというと思わない	1728	24.4%
	そう思わない	915	12.9%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	223	3.1%
	無回答	15	0.2%
問14	この授業は目的や達成目標が明確で体系的であった。		
	そう思う	1569	22.1%
	どちらかというと思う	2944	41.5%
	どちらかというと思わない	1200	16.9%
	そう思わない	533	7.5%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	833	11.7%
	無回答	16	0.2%
問15	授業担当者の熱意を感じた。		
	そう思う	2107	29.7%
	どちらかというと思う	3295	46.4%
	どちらかというと思わない	936	13.2%
	そう思わない	426	6.0%
	この授業にこの項目は該当しない、わからない	304	4.3%
	無回答	27	0.4%

総表

問16	この授業へのあなたの出席状況は良かった。		
	そう思う	4648	65.5%
	どちらかというと思う	1827	25.8%
	どちらかというと思わない	387	5.5%
	そう思わない	158	2.2%
	この授業にこの項目は該当しない, わからない	27	0.4%
	無回答	48	0.7%
問17	あなたの受講態度は良かった。		
	そう思う	2901	40.9%
	どちらかというと思う	2872	40.5%
	どちらかというと思わない	890	12.5%
	そう思わない	266	3.7%
	この授業にこの項目は該当しない, わからない	130	1.8%
	無回答	36	0.5%
問18	この授業について, あなたの予習や復習の時間は, 1回の授業に対してどの位ですか。		
	3時間以上	257	3.6%
	2~3時間	388	5.5%
	1~2時間	1072	15.1%
	1時間未満	2387	33.6%
	ほとんどない	2976	41.9%
	無回答	15	0.2%
問19	この授業の理解を深めるために, オフィスアワーなどを利用した。		
	そう思う	239	3.4%
	どちらかというと思う	369	5.2%
	どちらかというと思わない	494	7.0%
	そう思わない	3762	53.0%
	この授業にこの項目は該当しない, わからない	2200	31.0%
	無回答	31	0.4%
問20	あなたはシラバスに記載されているこの授業の達成目標を達成した。		
	そう思う	929	13.1%
	どちらかというと思う	2401	33.8%
	どちらかというと思わない	1366	19.3%
	そう思わない	705	9.9%
	この授業にこの項目は該当しない, わからない	1571	22.1%
	無回答	123	1.7%

Ⅲ. 2 設問についての回答概要と平成14年度調査との比較（問1 問4は割愛）

本調査における学年別内訳は1年次から4年次とそれぞれ12.6%、40.9%、44.0%、1.4%である。2年次と3年次合わせて84.9%であり、本調査結果は主としてこれらの年次の学生の傾向を反映したものであることになる。また、1年次と2年次は履修登録上限措置の適用学生であり、その割合は53.5%である。

問5 この授業科目を履修するにあたって、授業要項（シラバス）を読んだ。

「そう思う」と積極的に肯定した割合は44.7%で、教員の授業実践に対する設問（問5 問17）中最高である。「どちらかというと思う」（22.6%）を合わせた肯定的回答は67.3%であり、問15、問7に次いで高い。平成14年度調査（以下、「前回調査」と略記）における肯定的回答は60.5%であり、改善の傾向が認められる。また「そう思わない」とした割合が18.1%であり、前回調査（25.7%）より明らかに減少していることが注目される。シラバス利用が徹底されてきつつあることの現れであろう。

問6 （前項に4または3と回答された方に尋ねます）シラバスと授業内容は一致していた。

「そう思う」（31.0%）、「どちらかというと思う」（31.7%）を合わせた肯定的回答は62.7%である。前回調査では53.1%であり、改善が進んでいる。また設問への回答の特徴は「どちらかというと思う」（3.9%）、「そう思わない」（2.3%）を合わせた否定的回答が6.2%と低率であることである。シラバスと授業内容は一致していると受け止められていると判断してよいであろう。「わからない」（8.9%）と無回答（22.4%）が合わせて31.3%あり、前回調査（40.9%）より低下しているとはいえ、依然として高率であることは問題である。

問7 授業時に、成績の評価基準や評価方法が明確に説明された。

「そう思う」（34.3%）、「どちらかというと思う」（36.0%）を合わせた肯定的回答は70.3%であり、問15に次いで高率である。前回調査（60.3%）より10%増加している。単にシラバスに記載するのみにとどまらず、授業において積極的に言及して学生に周知をはかる努力が進展していることが伺える。評価基準や評価方法を明確にしておくことは学生の勉学努力の具体化にもつながることであり、この改善傾向はさらに一層押し進める必要があるであろう。

問8 この授業では、教材（テキスト・配布資料・OHP）の使い方が適切であった。

「そう思う」（27.2%）、「どちらかというと思う」（35.7%）を合わせた肯定的回答は62.9%である。前回調査では59.5%であり、低下はしていないがほとんど同率である。肯定的回答の割合は決して高率とはいえず（授業科目によっては90%を超える例がある）、具体的な教育内容の改善が求められているといえよう。

問9 授業担当者の説明は聞き取りやすかった。

「そう思う」（28.2%）、「どちらかというと思う」（37.3%）を合わせた肯定的回答は65.5%である。前回調査では67.7%で、全設問中第3位の率であったが、今回はわずかとはいえ下回る

結果が出た。また、否定的回答も 30%を超えている (32.8%)。調査件数が前回より圧倒的に増加したことの影響は考慮しなければならないが、前回報告書の指摘を再確認する必要がある。すなわち「ことは授業内容の肉声による伝達にかかわることであり、30%近い学生が否定的回答を寄せている現実には重いものがある。教官個々による一層の改善努力が必要であることを物語っていると考えられる」。

問10 板書の字は読みやすく、ノートはとりやすかった。

「そう思う」(21.6%),「どちらかというと思う」(32.5%)を合わせた肯定的回答は 54.1%であり、全設問(学生の自己評価項目を除く)中最低率である。前回調査(問12 ノートはとりやすかった)でも同様であり、肯定的回答は 50%に達していなかった(48.1%)。授業内容を記録として残しておくことに困難を感じている学生が 40%に達することは重大であり、今後の改善努力が最も求められている課題のひとつであるといえる。

問11 自学自習のための指示(予習または復習の指示、課題の出し方等)は適切であった。

「そう思う」(22.4%),「どちらかというと思う」(35.8%)を合わせた肯定的回答は 58.4%であり、前回調査(59.4%)とほぼ同率であった。この設問の場合、回答には授業内容の把握程度が関わっていると予想され、「わからない」が 11.9%で、前回調査と同様に全設問中最高率であることが注目される。問12における肯定的回答が低率であることとも間連があるのかもしれない。

問12 この授業は学生の反応や理解度をみながら進められた。

「そう思う」(19.4%),「どちらかというと思う」(36.6%)を合わせた肯定的回答は 56.0%であり、問10に次いで低率である。前回調査時にも低率であり、52.2%であった。日常的な授業の中で学生の反応や理解度を把握するのは必ずしも容易ではない。ミニテストや演習を導入するなど、授業形態の改善・工夫が必要なのかもしれない。

問13 授業の内容に興味を持て、学習の意欲がわいた。

「そう思う」(18.6%),「どちらかというと思う」(40.8%)を合わせた肯定的回答は 59.4%である。前回調査時は 58.3%であり、ほぼ同率である。学生が全くの受身的学習者であるはずはなく、したがって肯定的回答が低率に留まっていることについては、彼等自身の主体性の問題も問われてしかるべきである。しかし、問10 問12の肯定的回答が低率であることを考慮するならば、授業改善を通して学生たちを自主的・意欲的学習に導く余地はまだかなり残されているととらえる必要があるであろう。

問14 この授業は目的や達成目標が明確で体系的であった。

「そう思う」(22.1%),「どちらかというと思う」(41.5%)を合わせた肯定的回答は 63.6%で、比較的高率である。前回調査も同様で、63.8%であった。近年授業の「目的」や「達成目標」の概念が整理され、それにもとづいてシラバスにも記述することが徹底されてきたが、その効果

の現れかもしれない。その意味ではここ数年繰り返されているFD活動等の成果ともいえるであろう。

問15 授業担当者の熱意を感じた。

「そう思う」(29.7%),「どちらかというと思う」(46.4%)を合わせた肯定的回答は76.1%であり、全授業評価項目中最高である。前回調査においても72.8%であり、最高であった。教官の熱意は確実に学生たちに伝わっており、喜ばしい。

問16 この授業へのあなたの出席状況は良かった。

「そう思う」(65.5%),「どちらかというと思う」(25.8%)を合わせた肯定的回答は91.3%であり、非常に高率である。前回調査(87.2%)でも非常に高率であったが、学生たちはさらに積極的に授業に出席するようになったと自己評価している。

問17 あなたの受講態度は良かった。

「そう思う」(40.9%),「どちらかというと思う」(40.5%)がほぼ同率であることが注目されるが、両者を合わせた肯定的回答は81.4%で、これも高率である。前回調査では75.9%であり、ここでも学生たちは改善が進んだと自己評価している。

問18 この授業について、あなたの予習や復習の時間は、1回の授業に対してどの位ですか。

「ほとんどない」(41.9%),「1時間未満」(33.6%)であり、予習や復習の状況は好ましくない。しかし前回調査時における「ほとんどない」は52.7%であり、10%程度減少している。また2-3時間(5.5%),3時間以上(3.6%)もわずかではあるが増加しており(前回調査ではそれぞれ3.1%,3.3%),事態は改善の傾向にある。このことに関し、履修科目登録上限を設定したことの影響をみてとることはできないであろうか。すなわち、登録上限適用学生の割合は前回調査時には0.1%であったが、今回は53.5%である。登録上限設定の趣旨は単位の実質化にあり、自学・自習を促す措置が科目毎に採られはじめている。もし登録上限設定適用学生数の増加が改善傾向を生み出しているのであるならば、この方向はさらに自覚的に追求される必要があるであろう。

問19 この授業の理解を深めるために、オフィスアワーなどを利用した。

肯定的回答は8.6%に過ぎず、「そうは思わない」と明確に否定した回答は53.0%に達する。前回調査の結果も同様であり、この制度は現実的に機能していない。なおこの設問に対する「わからない」が31.0%で、前回調査時(36.7%)と同様高率である。このことはオフィスアワーの趣旨そのものが学生に伝わっていない可能性があることを示唆している。授業開始時点における確実な伝達が必要であろう。

問20 あなたはシラバスに記載されているこの授業の達成目標を達成した。

「そう思う」(13.1%),「どちらかというと思う」(33.8%)を合わせた肯定的回答は46.9%

に留まる。最終試験実施まえの調査であることも回答に影響していると考えられるが、「わからない」(22.1%)を肯定的評価に引き上げる努力が必要であろう。

IV むすび

平成15年度後期の「学生による授業評価」は対象を本学部で開講されている全専門科目に広げて実施された。本学部では数年前からカリキュラムプランニングに関するFD活動が積み重ねられている。昨年度からは履修登録上限設定の措置がとられ、単位の実質化が自覚的に追求されることになった。また現在は、学科ごとにJABEE受審に向けて教育課程の整備・改善作業が精力的に進行中であり、さらに法人へ移行するためのさまざまな措置が全学的にとられている。本調査は以上のような、教育活動に関する緊張がかつてなく高まっている中で実施された。

教育活動の効果は長期的視野で評価されるべきであり、決して短期的に一喜一憂すべきではないであろう。しかし、シラバスに関する設問等をはじめとして、いくつかの課題において、我々の歩みは明らかに改善への道筋をたどっている。この間に教育活動に対して払われた努力は膨大であるが、それが確実な成果を生み出しつつあることには自信を有してもよいであろう。もとより現状はあるべき姿にはほど遠く、課題は山積している。特に授業に対する学生の要望に応えるためには問10問12の、具体的教育技術にかかわる問題を解決する必要がある。これらの問題は困難であるが、誠実な自己点検の上に地道な努力を長期にわたって積み上げていけば、必ずや克服できるであろう。

あ と が き

平成 10 年 4 月に工学資源学部が設置されてから 2 年目の平成 11 年度後期に、2 年間の新カリキュラムの評価と授業改善のため、学生によるアンケート形式の授業評価方式が工学資源学部に初めて導入され、「工学資源学部および学科授業科目に関するアンケート」・「授業に関するアンケート」実施結果報告書として、平成 12 年 6 月学部自己評価委員会から公表された。

その後、平成 14 年度には新学部設置に基づく新カリキュラム完成時の授業評価の実施が決定され、「工学資源学部における学生による授業評価」報告書として、平成 15 年 10 月に学部自己評価委員会から公表された。平成 14 年度に続いて、平成 15 年度も引き続き後期開講専門科目についての授業評価の実施が平成 15 年度学部自己評価委員会(井上浩委員長)で決定され、教務学生委員会に付託された。本報告書は、平成 15 年度に行われた授業評価の結果をまとめたものである。

平成 14 年度から始まった日本技術者教育認定機構 (JABEE) や平成 18 年度に予定されている認証評価においても、学生による授業評価とそれに伴う授業の改善が重要な設問ともなっており、本報告書がこれらの教育評価及び教育改善の一助になることを願っている。

最後に、本アンケートの企画・実行・取りまとめに多大なご努力を頂いた平成 15 年度教務学生委員会ならびに授業評価ワーキンググループ、またご協力いただいた教職員ならびに学生に感謝申し上げます。

平成 17 年 2 月

工学資源学部 自己評価委員会
委員長 吉村 昇 (評議員)

付記

平成 15 年度教務学生委員会委員名簿

地球資源学科	白石 建雄 (委員長, アンケートワーキングリーダー)
環境物質工学科	菅井 幹夫
材料工学科	菅原 茂夫
情報工学科	河上 肇
機械工学科	長谷川 裕晃
電気電子工学科	今野 和彦
土木環境工学科	石井 千万太郎
素材資源システム研究施設	村上 英樹

平成 15 年度学部学務係名簿

係長	今野 悟
学務主任	橋本 穂
事務官	鎌田 香織
事務官	渡部 雅樹